シリーズ《生き続ける文化財》　：　秦氏と『広隆寺』

太秦という名称は、朝鮮半島から渡来した秦氏が、雄略天皇のころ絹をうずたかく盛り朝廷に献上して禹豆麻佐(うずまさ)の姓を与えられたから、という伝承があります。その一族の秦河勝が造営したのが『広隆寺』です。その東にある木島神社は秦氏ゆかりの神社として「蚕の社」と呼ばれ、境内には元糺の池があって、下鴨神社「糺の森」の名はこの池に発祥するともいいます。太秦には寺社のほか、多くの古墳も残っていますので、これらの秦一族が築いた遺産を巡りましょう。

《ご紹介》

太秦広隆寺は三条通に南面し、楼門の前を走る嵐電の姿は太秦の象徴的な風景となっている。この『広隆寺』は、日本書紀によれば、秦河勝が603(推古11)年に聖徳太子より仏像を拝受して蜂岡寺を造営し、623(推古 31)年には新羅から送られた仏像を葛野秦寺(かどのはたでら)に安置したとされている。広隆寺という寺名が文献に現れるのは 838(承和 5)年のことなので、蜂岡寺や葛野秦寺などと称された広隆寺の変遷については謎が多い。

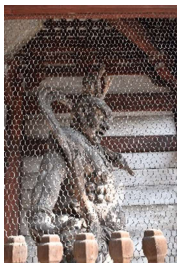
広隆寺の楼門を入り参道を北に進むと、右手に平安後期に建立された重要文化財の講堂があり、正面には聖徳太子立像を安置する上宮王院太子殿(本堂)がある。講堂と太子殿との間には秦河勝を祀る太秦殿があり、太子殿の西方には八角円堂で国宝の桂宮院(けいきゅういん)本堂がある。度々火災にあい、現在の建物は平安時代後期以後のものになる。特に有名な木造弥勒半跏思惟像は飛鳥時代のもので、戦後国宝第１号に指定されている。

広隆寺の東には秦氏の氏神社とされる大酒神社がある。もとは広隆寺の桂宮院境内に祀られていたが、明治の神仏分離令で現在地に移されたようだ。

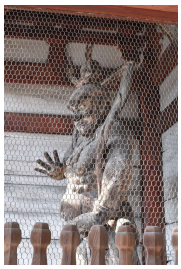
広隆寺を東に約 600 メートル行くと、秦氏ゆかりの神社である木島坐天照御魂神社(このしまにますあまてるみたまじんじゃ)、通称「蚕の社」がある。太子道に面して鳥居が立ち、参道を北に進むと拝殿、そして本殿がある。平安時代には祈雨の神として信仰されたようだ。本

➢　太秦広隆寺

仁王前
走る嵐電
モミジ客
広隆寺にて



上宮王院太子殿(本堂)



➢　蚕の社（右：三鳥居）

殿東側には養蚕神社(こかいじんじゃ)が建ち、養蚕・機織・染色技術に優れた秦氏にちなんで蚕の社と呼ばれるようになった。特に有名なのが三鳥居(みつとりい)。3 つの鳥居を組み合わせた形で、三方から拝むことができる造りになっていて、京都三珍鳥居のひとつに数えられる。この鳥居は元糺(もとただす)の池の中にあり、賀茂明神はこの地より下鴨糺の森に移ったといい、神社境内は京都市指定史跡になっている。

太秦には、5 世紀中頃に新羅から渡来した秦氏に関わるものとして、寺社のほか多数の古墳や遺跡がある。広

古地図みる　古墳の先に　広隆寺

隆寺の建立は 603 年だから、それ以前にできた古墳時代のものと広隆寺とはどのような関係にあったのだろうか。そこで、太秦地域で地上に姿を残す 3 基の前方後円墳を巡った。

蚕の社を南に約 800 メートル行くと天塚古墳がある。墳丘は全長約 73 メートル。前方部は南を向き幅約 50 メートル・高さ約 9 メートル、後円部が径約 40 メートル・高さ約 9 メートルで、後円部に 2 基の横穴式石室が設けられている。出土品等から 6 世紀代に属する古墳であることが判明している。住宅地と工場との境目あたりに古墳の森があり、そこに入ると石室もみることができた。

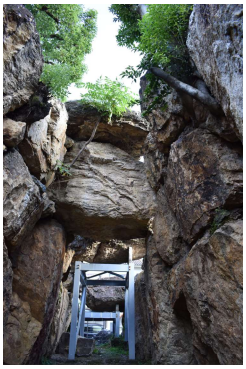
天塚古墳から北西約 1.2 キロのところに蛇塚古墳がある。この古墳は、太秦・嵯峨野で最大の後期古墳であり、巨石を用いた横穴式石室を設けていることで有名だ。大正時代には墳丘の一部を残していたが、宅地化により封土が失われ現在の姿になっている。墳丘は前方部を南西方に向けた全長約 75 メートルの前方後円墳といい、今も宅地の区画にその形跡を残している。石室は後円部に設けられ、全長が 17.8 メートル、玄室が奥行 6.8 メートル・幅 3.8 メートル・高さ 5 メートルを越える。側壁、奥壁とも 2～3 段に巨石を用いており、天井石は一石を除いて失われている。住宅地の真ん中に突然現われる巨石の古墳は異様な光景だが、周辺住民はこれを誇りに思っているようだ。

蛇塚古墳から北約 500 メートルのところに仲野親王墓古墳がある。この古墳は、全長約 75 メートルで前方部の幅が極端にひろがり、周囲には濠がある。現在は仲野親王高畠墓として宮内庁が管理しており、墳丘が良好に維持されている。北側の JR 嵯峨野線高架橋から眺めると住宅地の中にあるこんもりとした古墳の森が見える。

これら 3 つの古墳を、墳丘が描かれている

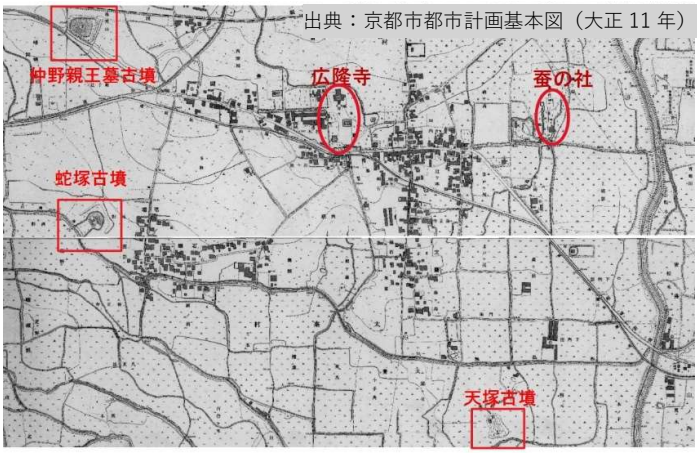
➢　天塚古墳

➢　蛇塚古墳



➢　仲野親王墓古墳

【図】広隆寺と 3 つの古墳



大正 11 年の京都市都市計画基本図【図】で見ると、古墳の軸線はいずれも広隆寺に向かっていた。広隆寺旧境内からは 6 世紀前半の円筒埴輪片が多数出土しており、広隆寺のあたりは寺建立以前から重要な意味があったことがよく分かる。広隆寺の地は、秦一族にとって欠くことのできない場所だったのだろう。